

The Kamenori Community かめのりコミュニティ

公益財団法人 かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

 公益財団法人
かめのり財団
Kamenori The Kamenori Foundation

2017 年 3 月 No.24

かめのり中高生アンバサダープログラム(フィリピン派遣)



今号の内容

- ◇ 設立10周年記念かめのりフォーラム 2017
- ◇ かめのり中高生アンバサダープログラム(KTAP)
- ◇ 第8回中学生交流プログラム
- ◇ かめのりセッション
- ◇ 第10回かめのり賞表彰式
- ◇ 高校生交換留学プログラム
- ◇ 高校生短期交流プログラム

設立10周年記念かめのりフォーラム 2017

2017年2月7日(火)「設立10周年記念かめのりフォーラム 2017」をアルカディア市ヶ谷(東京都千代田区)にて開催いたしました。2016年4月でかめのり財団設立10周年を迎えることができ、多くの皆様に支えられましたことを心より感謝いたします。今回のフォーラムは、約230名の関係者と弊財団が支援するアジアの高校生や大学院奨学生が集い、第1部では、第10回かめのり賞表彰者紹介、山口香氏の特別講演、そして財団の次の10年の方針が発表されました。第2部では、会食を交え、これまでの財団の事業、奨学生の紹介、そして過去のプログラム参加者OBによる三味線が披露されました。会場では、参加者の笑いや感嘆の声も起こる和やかな雰囲気のもと会は進められました。



詳細は中ページにてご紹介します。

かめのり中高生アンバサダープログラム (KTAP)

2017年1月21日(土)～29日(日)、全国から集まった10名の中高生がフィリピンに派遣されました。今年度初めて実施する「かめのり中高生アンバサダープログラム(以下、KTAP)」は「コミュニケーション能力を実感する」「フィリピンの文化、社会など異文化理解する」「体験を通じて協働する」という目的のもと、ホームステイ体験、高校訪問、日本大使館訪問、NGO訪問、タール火山の見学、そして国際交流基金マニラ日本文化センターとかめのり財団が共催実施している「にほんご人フォーラム2017(フィリピン)」に参加しました。

初日のオリエンテーションでは、AFSフィリピンの協力を得て、フィリピンの歴史、文化や習慣、ホームステイについての説明を受けた後に、滞在中どんな問題に直面する可能性があるかを考えました。ジェスチャーなどを使って伝えることや積極的に話したり聞き返したりすることが大切、そして、他との違いを「良い・悪い」ではなく「違い」として受け入れるというような彼らなりの解決策を共有し、考えを深めました。

また、街中で現地の人に聞きながらクイズの答えを探すグループ活動では、徐々に現地の人とのやりとりに慣れ、心配していたコミュニケーションも楽しいものだと思感する体験をしました。

訪問先の高校、マカティ・サイエンス・ハイスクールでは、先生からフィリピン語やフィリピンダンスの講義を受け、現地生徒とグループごとにダンスを練習、披露しま

した。2日間のホームステイ体験や高校訪問でフィリピン人の思いやり溢れる温かな人柄に助けられ、参加者はコミュニケーションをとることに自信がついたと話していました。

貧しい地域社会で暮らす子どもたちを支援するNGO団体への訪問では、9～11歳の子供たちと日本の遊びをしました。一緒に鶴を折った参加者の1人は「作るのが簡単で飛ばせる紙飛行機のほうがよかったかな」と相手への気づきがありました。英語を理解できない子どもたちもいて、共通語のない彼らとのコミュニケーションに苦労する経験もしました。

KTAPの後半の3日間は、マリキナ市で行われた「にほんご人フォーラム2017(フィリピン)」に参加しました。マリキナ市は2009年の台風で大きな被害にあったところです。日本語を勉強しているフィリピン高校生3人と日本の高校生1人がひとつのチームになり、計10チームが防災意識を高めるための防災カード作りをしました。JICAボランティアの専門家などから日本やフィリピンの防災についての講義を聞いたり、洪水の被害を受けた家族にインタビューをしたり、マリキナ市防災センターで防災システムなどを見学したりして情報収集をしました。その後、英語、フィリピン語、日本語が入り混じったやりとりをしながらカードを完成させていきました。グループ内で説明をしたり、お互いの言っていることを理解するのに時間がかかりましたが、

アクティビティで現地の人に質問



現地でのオリエンテーション

フィリピン人高校生との協働活動から得るものはとても多かったようです。民族衣装を紹介し合うファッションショーもあり、お互いの国を知り合う良い機会になりました。

KTAPのさまざまな活動では、うまくコミュニケーションができなかったり、思った通りに進まなかったり四苦八苦することも多かったと思いますが、フィリピンで出会った人々と多くの思い出を作ることができました。フィリピンの様々な場面での学びや気づきを大切に、今後それをどう活かしていってくれるかが楽しみです。

報告：(公財)かめのり財団 吉岡 知子



現地の子供達に読み聞かせ



にほんご人フォーラムでの様子

設立10周年記念かめのりフォーラム 2017



ご挨拶 理事長 木村 晋介

10年間、私共の財団は、若者たちに学びの場と、国際交流の機会を提供して、新たなリーダーとなるグローバルな人材を育成することを目的に活動してまいりました。

今日まで、私共の財団が、様々な形で支援をしてまいりました大学院生、大学生、中高生は約1000名にのぼります。また、教育関係者、関連団体、個人への助成など、その対象は約250を越します。公益財団法人の中では、決して大きい団体ではありませんが、その体格の割にはかなりのことをやってきたのではないかと、いう充足感が一方にございます。

「グローバル化社会」ということがいわれますが、これは、冷戦終結を受けて1980年代から始まったともいわれています。ヒト、モノ、カネのすべてが、国境に妨げられずに移動する方向に時代は進んできました。

国境を越えて移動していくものには、もう一つ「文化」がありました。グローバル化時代は、当然ながら、異なる多くの文化が触れ合う世界です。グローバル社会を安定したものとするためには、異文化が触れあうときの摩擦を最小限

に抑えなければなりません。そこで、最善の策として提唱されるようになったのが、多文化共生というアイデアでした。自己のアイデンティティを維持しながら他者の文化の違いを受け容れ、尊重し、その上に立って共に新たな価値を創造するということです。

かめのりの理念も正にそこにあります。いま、このグローバル化が、荒海にもまれようとしています。一方で昨年6月の国民投票を

経てイギリスがEUの離脱を決めました。そして、秋のアメリカ大統領選では、グローバリゼーションに反対するトランプ氏が大統領に選出されました。欧州の他の国にもこの流れが波及し、グローバリゼーションは終焉したという論評も目立つようです。他方、環境問題一つをとっても一国主義で解決できるものではありません。グローバル化は自然現象のようにこれからも必ず続いていく、という人もいます。私たちは、グローバルな視野をもった若いリーダーをアジア・オセアニアに輩出することの必要性は、そうした国際政治の行方によって、いささかも揺るがないと思っています。

仮に、世界がブロック化の道を選ぶとすれば、なおさらそのブロックを超えたものの見方が問われるのだと思います。

かめのり財団の、今日から始まる新たな10年は、このように今までとは違う新たな環境の下で進むことになります。皆様のさらなるご支援を賜りますようお願い申し上げます。



公益財団法人かめのり財団
理事長 木村 晋介

世界で活躍する人材を育てる

筑波大学体育系准教授

山口 香氏

私が柔道を始めた頃、柔道界は男性の世界でした。その中で生きていくためには、自分の意見を相手に伝えて理解してもらう必要があります。「生意気」という印象だったと思います。きちんと伝えれば理解してもらえた部分も多く、これは外国人に対しても一緒です。2020年に控えている東京オリンピック・パラリンピックには、多くの外国人が日本を訪れるはずです。日本人同士とは違い、互いに「言われなければわからない」ことがたくさんあるはずです。「自分を表現すること、伝えなければわからない」ことを私は柔道を通して学ぶことができました。

生意気だった私に、ある時、先生が「出る杭はうたれるが、出過ぎた杭はうたれない。お前が柔道界でやっていくには、出過ぎるしかない!」と言われたことを今でも覚えています。チャンピオンやメダリストは変わり者のように思えますが、「変わっている＝人と異なる」強い個性であり、人より前に出ることができ、成果を上げられるのです。スポーツのみならず、世界で活躍する人材は「扱いにくく、強い個性を持つ人」であり、こういう人材をどう育てるにかかっています。学校の先生が「いい子」と評価する人は意外と出世しません。むしろ言うこ

とを聞かないくらいの子のほうが将来性があります。強い個性を許容し、育てる人がいること、そんな社会であることがこれからの人材育成には大切だと思われます。また、「Why?＝なぜ?」ではなく、「Why not?＝なぜできないのか?やればできるはず!」と考え、挑戦する気持ちを高めていく、そんな環境が必要です。「グローバル」と、いくら口で言っても、このような社会を作る覚悟がない限り、世界で活躍する人材の育成は不可能です。

さて、スポーツを通して、世界で活躍する人材を育てるということはどういうことでしょうか。スポーツは地球文化であり、世界の人が1つのルールで競い合うものです。スポーツの意味と価値を考えると、例えば、ゴルフはセルフジャッジ(自己申告制)であるがゆえに、「自らを律する力」を養うことができます。良き行いも悪い行いも周りの人に左右されず、自身の判断で決めることがリーダーには求められます。テニスは試合中に監督やコーチはそばにおらず、自ら考え、判断し、行動することが求められます。選手は自立心を養われ、これは社会に出てからも大きな力になるはずです。ラグビーは「社会の仕組みを学ぶ」のに適していると感じ

じます。ラグビーは、1人で突進しても潰されてしまいます。面倒でも、ボールを繋ぎ、皆でタッチラインを目指します。社会の仕組みも全く同じで、正論であっても独りで突っ走れば上手くいきません。私は、スポーツは社会の縮図であると考えています。スポーツから学び社会に活かせることは、たくさんあります。ルールの中で競い合うことは互いを高めることであり、全体の発展や進化につながります。

時代が変われば求められる人材や必要な能力資質も変わります。現代、そして未来は、変化が激しく、予測ができません。先の東京オリンピックが行われた1960年代には「我慢と根性」が求められていたように思います。しかし、時代は移り、「我慢と根性」だけでは通用しません。我慢強く、従順であるだけではなく、クリエイティブな人間が求められています。また、決められたルールを守るだけの人間ではなく、ルールを作る側の人間を育てなければなりません。論理的な思考を持って、建設的な議論ができる人材を輩出していかなければなりません。

いよいよ2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。世界を見ることができ一方で、日本も見られます。日本の良きところを残し、変えるべきところを改め、50年後、100年後にどんな日本を次世代に引き継ぐのかを私たちは考える絶好の機会なのではないでしょうか。



山口 香氏



山口 香氏プロフィール：

東京オリンピックが開催された1964年生まれ。柔道世界選手権では日本女子として初の金メダリスト。ソウルオリンピック女子柔道銅メダリスト。現在は筑波大学体育系准教授として教鞭をとる傍ら、スポーツ庁参与、JOC 理事などスポーツ全般の普及活動に努める。主な著書「女子柔道の歴史と課題」「日本柔道の論点」「残念なメダリスト」他。

第1部

第1部は、主催者である弊財団理事長 木村晋介の挨拶、続いて創立者である評議員 康本健守から財団設立の経緯と設立への想いが語られフォーラムは始まりました。次に、ご来賓の独立行政法人国際交流基金の櫻井友行理事よりご祝辞をいただきました。櫻井理事からは「国際交流基金が海外で日本語教育の推進を行う中で、かめのり財団とは『にほんご人フォーラム』をはじめ、中国やベトナム等を対象としたさまざまな事業で連携をしてきた。今後も引き続き、連携して事業を続けていきたい』とお言葉をいただきました。続いて、第10回かめのり賞の受賞者、かめのり賞3団体、特別賞の方々が壇上に上がり、活動の様子と共に紹介されました。その後、ソウルオリンピック女子柔道の銅メダリストで、現在筑波大学体育系准教授でもある山口香氏より「世界で活躍する人材を育てる」をテーマに特別講演をいただきました。第1部の最後には、次の10年について、弊財団の方針を説明いたしました。



ご来賓挨拶（独）国際交流基金 理事 櫻井 友行 氏



公益財団法人かめのり財団 評議員 康本 健守

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 理事長 野口 昇 氏



第2部

第2部は、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の野口昇理事長による乾杯のご発声で幕が開き、映像による財団の事業や奨学生の紹介をいたしました。アジアから交換留学で来日している高校生、日本の大学院で学ぶアジアからの奨学生とそのOBやOGが紹介されました。奨学生からの一言からは、「かめのりファミリー」という言葉も飛び出し、かめのり財団を身近に感じているようでした。OB・OGは各方面で日本での研究を活かし活躍しています。また、過去の中学生プログラム参加者で、現在、大学で三味線を学ぶ川上さんは、三味線を披露してくれました。その後、壇上にはかめのり財団のプログラムで出会い、2016年に結婚した日本人と中国人の「かめのりカップル」である天沼さん、ジャレイさんが紹介され、会場が祝福ムードとなりました。楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、司会の宮嶋泰子が「会場に温かい雰囲気」という言葉でスタートした、設立10周年記念かめのりフォーラム2017は盛会のうちに幕を閉じました。

第10回かめのり賞表彰式

第10回かめのり賞は28団体の応募があり、厳正な選考により、かめのり賞3団体、特別賞の授賞が決定し、2017年2月7日(火)に表彰式が行われました。選考にあたり、高く評価された点は次のとおりです。

- ① これまでの活動歴、活動内容とその成果として、活動によりもたらされた変化や影響力が大きく、また、活動自体に自主性、独自性を持ち、他にない取組みをしていること
- ② 地域やボランティアの人々と共に活動し、また、行政、企業、教育機関および他団体等と密接に結びついて、有機的な協働・連携が進められていること
- ③ その活動が社会の必要性に合致し、将来を見据えた事業展開を考えていること

これらの点に加え、アジアを中心とした活動か、青少年を主眼とした交流や人材育成であるか、また支援する側と支援先が直接交流する活動をしているかという点にも着目しました。



記念の盾と活動奨励金を
理事長の木村より贈呈

第10回かめのり賞 表彰者(敬称略)

特定非営利活動法人 国際ボランティア学生協会



様々なセクターを繋ぎながら、国際協力・環境保護・地域活性化・国内外での災害救援の分野で、学生の力を活かした活動を通じて、国際社会にて貢献できる人材の育成と、アジアと日本の若者の相互理解の推進に多大な貢献

特定非営利活動法人 地球市民の会



佐賀県を中心に、「地球市民としての意識を育てる」ことを重視し、アジアでの教育支援や村落開発、韓国・中国の学生との交流事業、国内での国際理解ワークショップを通して、若者の育成と国際理解の推進に多大な貢献

特定非営利活動法人 ふじみの国際交流センター



埼玉県ふじみ野市を中心に、「多文化が未来を拓く」をモットーに、行政と連携しながら、在住外国人の生活支援、日本語指導、外国籍児童への教育支援を通じて、長年地域住民の相互理解と多文化共生社会の実現に大きく貢献

片桐 和子・片桐 昭吾 【特別賞】



1997年から「教育と環境の「爽」企画室」の活動をはじめ、インド・ビジャパトナムの「子どもの憩いの村」建設・運営から日本とインドを繋ぐ青少年の国際交流・共学のスタディーツアーまで、長年にわたり、発展途上国の恵まれない子供達への教育・生活支援に多大な貢献

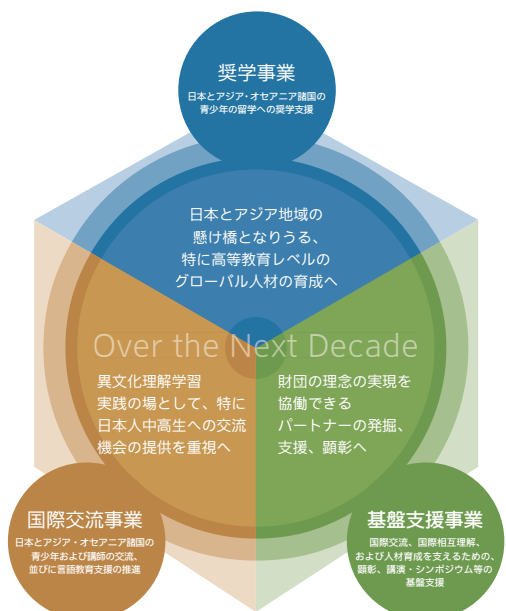
次の10年に向けて

弊財団理事・事務局長 西田浩子より、10年の実績と次の10年に向けてかめのり財団が目指す方針が紹介されました。実績では、これまでの10年で、計1,136名の個人を支援、また、かめのり賞の顕彰では81団体・個人、事業助成は44団体/73事業を支援しました。

また、次の10年での若い世代の育成について重視する3点が紹介されました。

1. 前向きにチャレンジし続ける「かめのりスピリット」をもつ若い人々の育成
2. 異なる文化の人々と信頼関係を築き協働できる若い人々の育成
3. ゼロから考え創る力を持つ若い人々の育成

具体的な事業についてはいまだ検討中であるものの、現在考えている事業方針として、右図のように弊財団が軸としている奨学、国際交流、基盤支援の3つの事業において、奨学事業では、高等教育レベルでのグローバル人材の育成、国際交流事業では、日本の若い世代、特に中高生の支援。また、地域としては中国、韓国、東南アジアを対象とする事業を中心に支援していくこと、基盤支援事業では、かめのり財団と目的や理念を共にするパートナーと事業を推進していくことが、方針として示されました。



第8回中学生交流プログラム フィリピン派遣

昨年のタイに続き、今年も(公財)AFS日本協会により、第8回中学生交流プログラムがフィリピンにて実施されました。今年のメインテーマは「平和」。第二次世界大戦の激戦地コレヒドール島への訪問を中心に戦争の悲惨さと平和の尊さを学ぶ旅でしたが、参加した中学生からは「日本は被害者だと思っていた。加害者でもあったことは知らなかった」、「かつての敵である日本人を憎まない決意をしたフィリピン人に感動した」などといった感想が聞かれました。そして何より印象的だったのは、日比双方から異口同音に語られた「戦争には勝者も敗者もない」という真理。まさに教科書では十分に語り得ない「現場学」の真髄が、平和の大切さを学ぶこの貴重な機会に発揮されたことは何よりの成果でした。

現場といえば、学校という空間に足を踏み入れることができるのもこのプログラムの重要な特徴のひとつ。言葉も文化も違う、しかしインターネットメディアによるグローバル情報を共有する同世代の若者同士の出

会いがいったいどんなコミュニケーションを生み出すのか、その化学反応の醍醐味はまさに現場に行ってみないと味わえません。そんな生徒たちのご家庭にホームステイであがらせてもらえたことも、参加者たちの異文化への扉をさらに押し広げる大きなきっかけになったはずです。

すっかり仲良くなったスタッフとの空港での涙の別れは、おおらかで優しく楽しい国フィリピンの印象を強烈に参加者たちの胸に刻みつけたに違いありません。そして、それは他人からの伝聞やメディア情報に左右されない真のフィリピンイメージとして一人ひとりの心の中に末永く根強く残り続けることでしょう。

報告：第8回中学生交流プログラム団長／四日市大学教授
山本 伸

コレヒドール島で戦跡を見学



かめのりセッション

2017年1月7日(土)～8日(日)、かめのり奨学生として各国に派遣された26名の中高生たちが国立オリンピック記念青少年総合センターに集まり、プログラムでの学びや帰国後の活動を振り返りました。

初日、振り返りのセッションでフィリピンに派遣された中学生は「プログラム参加前、家族や友達など限られた人たちとばかり話すため、お互い明確に意思を伝えなくても伝わった。しかし、現地の人と話しをする中で『話す・説明する・お礼を言う』など、きちんとコミュニケーションをしなければいけないことを学び、現在は意識して会話をしよう」という意見がありました。また、カンボジアに派遣された高校生からは「カンボジアの寺子屋で欲しい物は何かと聞くと『ない』と言われて驚いた。価値観の違いなのかもしれないが、鉛筆がなかったら地面に書けばよいと言っており、日本のように選択肢が多いことが本当に良いことなのか考えさせられた」と、プログラムから学

発表準備の様子



んだことを話してくれました。

振り返りの後は、プログラム毎に一番伝えたいことをまとめて発表しました。参加者自身の体験を振り返り、それらを共有することは彼らにとっても考えを整理する時間となり、新たな気づきを得られるよい機会となりました。

2日目は、プログラム混合でのグループで協働するアクティビティを行いました。今回の課題は「アジアの旗」と「かめのり財団 Facebook ページのバナーデザイン」作成で

かめのり Facebook バナーデザイン発表



した。参加者が思うアジアのイメージ、プログラムを通して得た感情、学び、考えなどを一つの絵にまとめました。様々な色で多種多様な人たちを表現したり、角がない丸の国旗は平和を表したりと、彼らなりに考え、形になったデザインはどれも素晴らしいものとなりました。

Facebookのバナーデザインは、参加者全員による投票で、投票数の多かったデザインが2017年4月からかめのり財団Facebookページの顔として採用される予定です。

高校生交換留学プログラム 長期留学生帰国

昨年3月に来日したアジアからの受入生が、本年2月、日本での留学生生活を終え無事帰国しました。帰国前懇談会では、来日時に見せた不安そうな表情とはうって変わり、自信に満ち溢れたような表情を見せ、上達した日本語で日本での体験、留学で得たことやこれからの目標を発表してくれました。「最初日本に来たときには、自分がここで生活できるなんて信じられなかったが、勉強もホストファミリーとの生活もがんばったら、いつの間にか生活ができるようになった」「自分が今までいかにわがままに暮らしていたかを思い知った」「友達とホストファミリーに感謝したい。いなければ問題を乗り越えられなかった」

「あきらめず、強い意志を持って、言動に責任をもてる人になりたい。失敗しても経験という財産になるから」「友達から日本語を学んだが、自分も友達に英語を教えることができうれしかった。将来は英語の先生になって日本の子供に教えたい」「日本での生活で助け合うことの大切さを知った。人生は誰かの『助け』があることで変わる。将来は誰かを助けられる弁護士になりたい」と話してくれました。日本での留学生活ではたくさんの楽しさと同時に、たくさんの困難もあったことと思います。それを乗り越えた自信はこれから彼らの人生の「助け」になってくれると信じています。



高校生短期交流プログラム 韓国から高校生来日

本年1月に、韓国から5名の受入生が(公財)YFU日本国際交流財団の短期受入プログラムで来日しました。このプログラムは約1ヶ月の間、ホストファミリーと共に生活をしながら、日本の高校に通い、高校生活を体験するプログラムです。日本の家族や同世代の高校生と交流し、文化や日本語のみならず、生活様式、習慣を直に体験することができます。来日時には「滞在中たくさんの友達をつくりたい」「日本の文化をたくさん経験したい」「直接日本語を聞きながら、日本語を習いたい」

「1ヶ月一生懸命勉強して帰りたい」とそれぞれの思いや意気込みを語ってくれました。昨今、日本と韓国との関係で、喜ばしいニュースは聞かれません。しかし、今回来日した5名が、このプログラムを通して作ったホストファミリーや友達との「友好関係」を継続すること、そして、この体験を通じて知った“日本”や“日本人”について帰国後、周りの多くの人に伝えてくれることで、2国間の懸け橋となってくれることを期待しています。



今後の予定

2017年 4月 大学院留学アジア奨学生 新奨学生授与式・交流会
6月 ベトナム高校生にほんご人100人訪日事業
第11回かめのり賞 募集開始

発行人／西田 浩子 編集／松本 龍一
デザイン／イワブチサトシ (BUTI design) 印刷／佐伯印刷株式会社

講演会の募集

弊財団理事 王敏(ワンミン/法政大学教授)による講演会の開催団体(高校、大学、国際交流団体など)を募集します。身近にある日本と中国の交流の歴史などを交えながら「異文化理解の必要性」を主なテーマとする講演です。詳細はホームページでご確認ください。

かめのり 講演会

で 検索



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！

公益財団法人 **かめのり財団** The Kamenori Foundation

〒160-0011 東京都新宿区若葉 1-22 ローヤル若葉 211

TEL : 03-3234-1694

FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp

URL : <http://www.kamenori.jp/>